

インタープリターとして郷土芸能に関わる ～郷土芸能保存会との協働で行ったプログラム～

福世 健吾 原島 香（自然教育研究センター）

キーワード：郷土芸能、奥多摩町、山のふるさと村、小河内の鹿島踊、鹿島踊保存会

1. はじめに

アメリカの国立公園で生まれ発展してきたインタープリテーションは、日本においても自然公園から始まり広がっていった。そういった経緯から、インタープリテーションは自然公園という場や環境教育との関わりが強く、自然環境や動植物を題材とした、自然と人をつなぐインタープリテーションが多く実践されてきた。

しかし、インタープリテーションに関わることができる分野は幅広く、歴史・文化もその地域の重要な資源としてインタープリターが扱うべきもののひとつである。今回は、そういった歴史・文化の中でも郷土芸能にスポットを当てた体験プログラム（日帰りツアー）の実例を報告したい。

2. 「小河内の鹿島踊」と山のふるさと村

東京の西の端・奥多摩町は、郷土芸能の宝庫と呼ばれ、多くの郷土芸能が地元の方々の郷土愛と郷土芸能に対する情熱により継承されてきた。そんな奥多摩町の郷土芸能の中でも、特殊な状況に置かれているのが「小河内の鹿島踊」である。

奥多摩町の旧小河内村は小河内ダム建設により住民が移住を余儀なくされた歴史を持つ地域であり、「小河内の鹿島踊」は、この旧小河内村の「日指」「岫沢」「南」と呼ばれていた3つの集落で踊り継がれてきた芸能である。人々の移住によって一度は途絶えながらも、郷土芸能に対する思いによって復活し、別の地域で発足した保存会によって踊り継がれている。端的に表現するなら「故郷を失った郷土芸能」と言える。



写真1 小河内の鹿島踊 その奉納舞の様子とツアー参加者たち

山のふるさと村は、まさにこの「小河内の鹿島踊」が生まれ、継承されてきた土地に、人々が移住したのち作られた自然公園施設である。私たちはこの地で活動するインタープリターとして、故郷を失い、今後の保存・継承に不安を抱えながらも踊り継がれている芸能

に光を当て、共にこの芸能に関わり、盛り立ててくれる人を増やしたいという思いで本プログラムを実施した。

プログラムの企画にあたっては、保存会の拠点となっている練習場に何度も足を運んだ。そうして築いた信頼関係があってこそ、保存会の方々の全面協力があり、それが成功のカギとなった。



写真2 鹿島踊保存会の練習場にて踊りを教わるインタープリター

3. 目指したもの（本プログラムの目的）

事前申込で有料のツアーにおいては、（特に歴史・文化を扱うツアーにおいては）「興味がない」方が参加することはあまりない。そこで、本プログラムは、興味を持って参加してくれる方々が、次のような行動を起こしてくれることを目的とした。

- 「また見に来てくれる」（←これだけでも演じ手にとっては重要）
 - 「知人に伝えてくれる」（←関心を持つ人が増えることにつながる）
 - 「サポーターになる」「共に保存・継承を担う演じ手となる」
- そこに至るには、継承者の思いに共感し、それまで接点がなかった「小河内の鹿島踊」を身近に感じてもらわなくてはならない（図1）。そのために保存会の皆様との協働で取り組む必要があった。

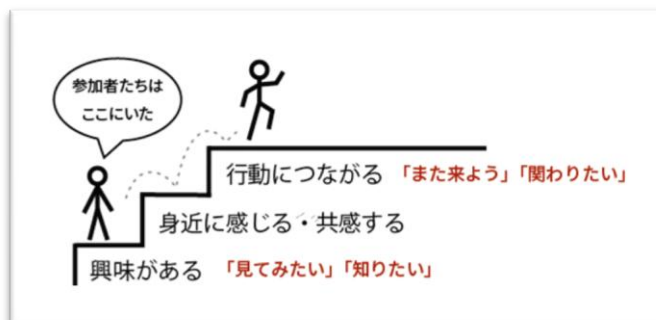


図1 本プログラムにおける目的：「参加者にこうなってほしい」

4. 事例①：神社での奉納舞の見学を軸としたツアー

最初に「小河内の鹿島踊」という郷土芸能にスポットを当てたプログラムを実施したのは2019年、神社で行われる奉納舞の見学を軸としたツアーであった。

集合した参加者はまず、現在「小河内の鹿島踊」の奉納舞が行われている小河内神社へ移動し、そこで奉納舞を見学した（前頁の写真1には、そのツアーの参加者も写っている）。

事前に重ねた聞き取り取材を活かして作成した配布資料も好評で奉納舞の見学中もインタープリターが、所々で解説を挟むことで、ただ目の前で演じられる踊りを見学するだけでは辿り着けない深い理解にまで到達することができた。

その後、「小河内の鹿島踊」の故郷である山のふるさと村に移動し、園内に残る集落跡を巡る歴史ウォークで締めくくった。

5. 事例②：保存会との交流や踊りの体験を軸としたツアー

最初のツアー（事例①）を組んだ2019年以降、新型コロナウイルスの感染拡大により、神社での奉納舞は行われていない。そんなコロナ禍の続く2021年に実施したのが、奉納舞の見学ではなく、保存会の方々と交流し、実際に踊りを教わる体験を軸としたツアーである。

このツアーは、山のふるさと村園内に残る集落跡を実際に集落に住んでいた方と一緒に巡る歴史ウォークから始め、ついで、保存会の方々が持って来てくださった踊りの衣装や小道具が展示されたメイン会場に移動。解説を聞いたり、小道具や衣装に触れたり、目の前で踊りの実演を見せてもらったりしながら「小河内の鹿島踊」への理解を深めていった。

そしてお昼休憩を挟んでこのツアーのクライマックスである踊りの実践（体験）。小さなグループになり、保存会の皆さんがグループごとに付いて踊りの直接指導をしてくれた。最初は振りがおぼつかなかった参加者たちも、丁寧な教えのおかげか、動きがどんどん軽やかになっていった。

イベントのふりかえりの時間での参加者のコメントや、事後アンケートでは、「故郷を失い一度は途絶えてなお復活し継承されてきたことに感動した」「保存会の方に直に教わる貴重な体験ができた」「実際に踊れたことが嬉しかった」「今度は奉納舞を見にこようと思う」といった感想が並び、目的の達成を感じられた。



写真3 事例②のツアーの様子 参加者全員で踊る

6. 考察と今後の展望

どちらの実例においても目指したものは同じだったが、目的の達成度に目を向けると、事例②の踊りの体験を軸としたツアーの方が達成度が高かったように感じている。歴史・文化の分野においては、

それを継承してきた「人」と関わることで、理解や共感が格段に深まる。そういった意味では本プログラムは「人と人を繋ぐ」ツアーであったとも言える。

前頁で「小河内の鹿島踊」のことを「故郷を失った郷土芸能」と書いた。「小河内の鹿島踊」は、地域で継承されてゆく、郷土芸能としての本来の姿を保てなくなった芸能とも言えるが、同時に他の地域に住んでいる方と繋がり始めた郷土芸能と見ることもできる。

私たちは山のふるさと村のインタープリターとして、今後もこの新しいステージに入った郷土芸能を盛り立てる力になりたいと思っている。